

『安楽音』の俳諧史的位 置

—— 俳諧の漢詩文調を考える ——

雲 英 末 雄

富尾似船の編著『安楽音』(横本四冊)は、延宝九年三月に刊行され、句数千四百六十句、作者二百八十四名をおさめ、彼の俳壇の勢力を十分示すにたるものである。この書に關しては、すでに今榮藏氏が「談林俳諧史」において、漢詩文調最初期の作品を含むことを指摘され、この風鉢の創始者が似船一派であつたとの断定はさげながらも、それがこの周辺の京俳壇から芽生え、流行の端緒を作つたものであらうと、少なからずその意義を認められてゐる。筆者は、この今氏の示唆に基づいて似船の作品に焦点を合わせ、具体的に分析を行ないながら、似船らの漢詩文調がどのような性格のものであるかを考察してゆきたい。

『安楽音』は、延宝六年から延宝八年までの作品を収め、発句や付句を中心とし、歌仙二卷、四十四二卷、百韻一卷より成つてゐる。これらの中から、似船の発句に中心を置きながら考察してゆこうと思ふ。似船の発句は全部で六十八句ある。そうしてそれらの大部分のものにいわゆる漢詩文調が見られるが、便宜上(A)語

調表記文体に漢詩文調が見られるもの、(B)中国の人名や特有の漢語の見られるもの、(C)漢詩文の詩句取りの見られるもの、(D)全体として漢詩文的な誇張した表現をもつものに分類し、適宜説明を加えてみようと思ふ。

(A)に分類される発句

- ① 社家ノ曰ク天神何ヲ言哉和光の梅
 - ② 花を仏況や百韻におゐてをや
 - ③ さかつきや水成^ス連哥^ヲ紹^レ巴ノ字
 - ④ 燕宿し富貴ぞ敵^ク外科ノ門
 - ⑤ 片々^{タリ}光次の蟹質種より
 - ⑥ あへれ蠅や燈心を以テ飯をほる
 - ⑦ 烏羽瓜や八百屋立られての名にハ非ス
 - ⑧ 醋はじかミ君子乃徳有青^豆ハ
- これらは、①の「曰ク」とか、②の「況ヤ……おゐてをや」とか、③の「水成^ス連哥^ヲ」⑤の「片々^{タリ}」⑥の「燈心を以テ」⑦の「名にハ非ス」などである。また⑧の「君子乃徳有青^豆ハ」のごとく倒置法の用法も見られる。こうした漢詩文や漢語調の強い

表現や、独特の表記は、既成の俳諧においては、特殊な和漢俳諧以外には見られぬものだけに人々の注目を大いに集めたと思われる。似船以外の俳人の句を示せば、

治リ卒ニ芥子乃中迄御代の春

門松や繁ニ金鈴ヲむまの年

春に鳴レリ鳥追ヲ以テ編木の音

春立や生ニ大服笠ニ暁炬燃

花ナラズヤ予ニ告テ云クみよしの、

草ハ唄ス上ニ凶ニ景宿一ほととぎす

また付句や連句では

達磨の目から声火とぶ見ゆ

一棒ヲ以テ生死乃海のミをつくし

とか、

血を以て書ヌやまと撫子

岩之曰ク小指のさきに真砂地有

などに、その例を指摘することができる。ただこれらの句は、そうした漢詩文調の語調・表記文体などをとりのぞけば、さほど特異な句ではない。

(B)に分類される発句

①けさそ天下碧玉の春錐硯を

②粵菓子婦娥ツタヘテ「五位」六位

③朝顔や無常の使隙朝にのる

④月白粉セリ楊貴妃帰ツテ唐の芋

⑤菊乃砂金。淵明奇進セリ隱居料

同所一妙

富尾嘯琴

多田一步

畑江林孝

江州梅龍寺公荷

慕昔

鞭石

(似)船

(真)尚

ここでは、碧玉・嫦娥・隙駒・楊貴妃・淵明などを指摘することができ、こうした人名や漢語は、すでに貞門や談林の俳諧においてもしばしば素材として用いられてきている。楊貴妃に例をとれば、ふるく『犬子集』に「楊貴妃の心いかほどせきぬらん／華清宮にもしはぶきの声 慶友」とあり、また『西鶴大句教』にも「楊貴妃も無名の酒をあたりめて／馬嵬がはらは恋の中宿」などとある。しかしこれらの例は、たんに楊貴妃の行動を素材としてとりこみ、それを表現したにとどまるが、『安楽音』では④に見られるごとく、それはすでに素材としてではなく素材の原拠に及び、その原拠を示すべく、漢詩文調の中にことさら強いアクセントを持ってはめこまれているのである。しかもその表現効果は、明らかに漢詩文調によって、そうした歴史上の人物を滑稽化したたり茶化したりする傾向にある。こうした傾向は⑤などに顕著で、菊好きの陶淵明が隱居料を奇進セリなどという表現で示されており、陶明の故事を知る者に、そのパロディのおかしさを認識させることになる。他俳人の句では、

花に酔リ夫乾坤へ御一所文匣

花帯タリ唐津焼の菜天古酒ヲ逸ル

葉乃落る時飛や列子が駕の棒

また、付句・連句では

根本あさ日。本ねりの玉

唐草細工伏羲と女禍と合店に

恋の山の端おしろいの雲

双娥の月消流の鹽に影をうつし

夏木軒重尚

如帚

玄鶴

松陰

一思

※

張良をよくはな紙乃浪

韓信がうち股くゝる蠟燭

などがその例として示される。

(C)に分類される発句

①涅槃ノ雲有心にして筆乃莖ヲ出

②原既に放テリ光明標善ノ薩

③みがくらん稻妻の影蝸牛乃角

④さや豆や在ニ釜中ニ月を鳴ル

思はずよ林下に茶を煮て紅葉ヲ

①は陶淵明の「掃去來辭」の「雲ハ無心ニシテ以テ出ヅ岫ヲ」(古文前集)の文句取り、②は屈原の「漁父辭」の「屈原既ニ放タレテ游ビ於江潭ニ」(古文後集)の文句取り、③は白楽天の「無常」の「蝸牛角上争フ何事ヲ石火光中寄スル此ノ身ニ」(倭漢朗詠集)、④は曹植の「七步詩」の「萁ハ在ニテ釜下ニ燃ニ、豆ハ在ニテ釜中ニ泣ク」(古文前集)、⑤は白楽天の「秋興」の「林間緩ク酒ヲ焼ニ紅葉ヲ、石上ニ題シテ詩ヲ掃ニ緑苔ヲ」(倭漢朗詠集)の詩句取りである。これらに共通して見られることは、原典の持つ詩趣をいかに取りこみ生かすかということより、それらの詩句をいかに面白く見る者を笑わせるように置き換えるかという点、つまり換骨奪胎の面白さに比重がかかっているのである。他俳人のものではない、

素面乃色鮮矣(花乃時)

(論語の学而篇「巧言令色、鮮矣仁」)

いかのほりや二千里乃外子共ノ心

執筆

(柳)燕

秀海

丹羽くるるト浅

(白楽天の「三五夜中新月色、二千里外故人心」また付句・連句の例では、

浪をりかくるはな紙乃漣

嘆気にハ李白一斗の生薑酒

(杜甫の飲中八仙歌の「李白一斗詩百篇」)

天にあらハ願フハ玉子地黄丸

未央乃牛房花・清の五木湯

(白楽天の「長恨歌」)

光陰の楊弓いりあひ乃かね

百の媚宮一前乃貴妃寺前の花

魄キ去テ何一之ク豆てつはう

鞦を踏で同クおしむ兒一椽

夫天一地ハ万物の客舍タリ遊山寺

(白楽天の「長恨歌」、同じく「春夜」ハ倭漢朗詠集√李白

の「春夜宴桃李園序」)

月下の針口たゝく天ト秤

色鳥乃美女ハ地獄の木に宿す

(賈島の題李凝幽居「鳥宿池辺樹、僧敲月下門」)

漢ノ武帝乃日日記乃鷹

浜つたひ秋風起り米屋飛フ

(漢武帝の「秋風辭」)

蜀山兀としてつゝじの明松

南陽に桶の輪碎く暮ノ日

(杜牧之の「阿房宮賦」)

鳥有

暮山

員明

一思

玄鶴

しらず

丹波黒井住露白

磁枕電光石火はくち飛トビ
蝸牛のつ乃を鬼の諍トクひ

(白楽天の「対酒」)

などをあげる事ができよう。

(D)に分類される発句

- ① 告て明ぬ玉子乃親士世界コトノの春
- ② 屏風時テリ是レ離の世界桃ノ林
- ③ 産湯一貼灌や難陀大蛇之介
- ④ 紫雲凝て茄子光あり玉祭
- ⑤ 朝顔や無常の使隙アタリにのる

①のごとく倒置法を用いて、初鶏が鳴いて新年になったことを、屈折した表現「玉子乃親士」や誇張した表現「世界の春」などを用いながら描き出している。同じことは、他の句に關しても言える。②は離壇の背後に屏風があり、前には桃花が飾つてある情景を、「時テリ」「離の世界」「桃ノ林」と漢語めいた誇大な表現を用いて示している。③は、誕生会の有様と大酒飲みとを結びつけ、④は紫黒に光る茄子の玉祭の様子、⑤は人生のはかなさを際ワにハよリて、誇張して表現している。他俳人の発句では、正月の蓬萊のことを詠んだ

かち栗や維イ石巖々タリ蓬萊山

青巖ノ形亦昆布フ帯タリ蓬萊山

や、同じく正月の雑煮を詠みこんだ

杠コウ乃船かつほ飛入トレリ雑煮カの海

などを示せば十分理解されるであらう。

池永碧水

撰州金龍寺実賢

松以

以上便宜上四つに分類して示してみたが、おおよそこのような技法の中に似船らの漢詩文調は見られる。ところで次には、そうした漢詩文調における内容に検討を加える必要が生じてくる。すでに例示した資料で十分明らかのように、彼らは漢詩文を取り入れることによって、ことさらに句体を歪曲化し、異形を用い、発想の頓晦化をもたらししている。(A)や(D)はとりわけ、その点が顕著である。しかもそこに示されるものは、序文で「五絃索索として。南風迦羅を送れば。宿老町中。ふくさ物乃、温を解。帳篋阜なりし。唐国のむかしへさもあらばあれ。糸瓜乃かへのきんちやくなるへし。……あるひハ老人シキ人。桂馬に頼らちて。靈山会场に到りて。湯豆腐乃雪に嘯き。飛車を石空に停ては。坐に双林乃あけ鉄を愛す。あるハ若人は。煎酒乃涿水にうかぶ。鯉屋の輿に乗て三線を弾。芸に遊ぶ者其好スル所意味各別なり。……嗚呼治世之音ハ安ヲ以テ楽メリ其政コト和ヅバ也故ニ慶哉……」と述べるごとく、太平の世における、古典に姿をかりた、主として漢詩文調に姿をかりた現実の遊戯化、戯画化に他ならないのである。こうした姿勢は、すでに(B)や(C)の例でも明らかのように、歴史上や古典上の人物や詩句を戯化したり、また怪奇や奇談を語らうとする姿勢(例えば「母ハ竹氏夢レ吞ニ薄双ヲ生筍」)などと重ねられている。

筆者は『安楽音』の漢詩文調を中心に述べてきたが、いま一つそこに見られる重要な要素を指摘しておきたいと思う。それは、釈教語が著しく、この作品に見られることである。この釈教語を俳諧にとり入れたのは、言うまでもなく宗因であるが、それが延

宝五・六年から延宝末年にかけて京都を中心にかなりな流行が見られた。その間の事情は、拙稿「釈教俳諧・釈教句に関する一考察」^{註2}に比較的詳細に論じたので省略するが、『安楽音』における似船の例を簡単に示しておく。似船の発句の「涅槃ノ雲有心にして筆乃茎ヲ出」「ちる花や聖人一一流の御勸化へ」「産湯一貼灌、や難陀大蛇之介」「原既に放テリ光明標菩薩」「紫雲煖て茄子光あり玉祭」「麻がらや棚経乃説麟ノ林」「娑婆ノ十夜雨、や四衆の紙袋」などは、そうした釈教の例として挙げる事ができる。しかもこれらは、釈教語を用いたりその内容が釈教でありながら、表現はいちじるしく漢詩文調に結びついている。つまり釈教語が漢詩文調の中にはめこまれており、それらの混入した奇妙な俳風をそこに見ることができなのだ。こうした傾向を考えると、釈教俳諧と漢詩文調との間には、密接な関係が考えられ、釈教俳諧の素材である仏語（漢語）が何かのきっかけを得て、漢詩文調の俳諧にむすびついていったのではないかと思われる。

俳諧における漢詩文調といえ、我々はともすれば天和調・虚栗調のイメージを抱きがちである。つまり漢詩文のもつ緊迫したしかも高踏的な風韻によって、マンネリ化した談林調を脱し、また漢詩文的な境地を導入することによって、談林俳諧の卑俗性を越えて、純正詩としての蕉風俳諧に一步近づいたのだと。だがそうしたイメージは『安楽音』では、漢詩文調という語調や表記文体の上だけかろうじて共通点が見られるが、内容にいたれば、そこには何ら共通するものを持たない。それは、『安楽音』が漢詩文調を用いながら、主としてその詩句を換骨奪胎することによ

り滑稽感をうち出すという、貞門以来の伝統的な俳諧の本質理解に基づいているからに他ならない。

漢詩文調からははれるが、こうした『安楽音』の滑稽性を如実に示している事証をいま一つ指摘すれば、付句のところで「句並前後不同」として、その下部に小さく「五句付抜書モ入」という、注記を示せばよからう。五句付は、前句を五句出題し、それぞれの前句に付句を求める前句付の一形式である。その最も古い文献は、延宝六年三月八日の「似船点」であり、また貞門談林の論争の際、「俳諧熊坂」(延宝七年冬刊)において著者とおぼしき重頼が「扱又都の其内におほき雀のとび体は、シテ詞三条の如泉四条の似船ちう／＼さへづる五句付の銭」と述べて似船を非難している記述などもその間の事情を示したものであろう。これら五句付は、点者にとつて点料をかせぐ手段になり、それゆえそこには付合の稽古というより、遊戯的な要素や競技的な要素がかなりなまで入っていたと考えられる。それが付合と同じように扱われていたのである。こうした点においても『安楽音』の性格はうかがえるであらう。

二

似船の俳諧における出発点は、荻田安靜の門下としてである。したがって、初期には、貞徳流の発句が見られるのは当然である。『鄙諺集』(寛文二年)や『蘆花集』(寛文五年)の「何を風の口ばしりてや夕時雨」「はるの雨のいとや木目をはり仕事」などの発句を見れば、その典型的な形を認めることができる。しか

し延宝にいたり、俳壇の動向は激しい変化を見せ、菅野谷高政を中心として京洛でも新風談林化の動きが活発化してくると、似船は『隠蓑』（延宝五年）を編纂上梓し、新風に積極的に近づき、

その主要なメンバーとして活躍するようになる。その新しい傾向の句を抜き出せば「絵に拜む頭北面西うき世哉」「駕や花に帆をあげて通り町」「ちる花や上宮太子下化衆生」「むつごとや五十六億七夕まで」「つかさどる金箱や世界宿の春」「となふるや念仏師匠撰取不捨」などがある。ここに見られる特色は、一つには「むつごとや」の句に典型的に見られるように釈教語と現実的な卑俗な言葉である「むつごと」とのアンバランス、いわば雅と俗との落差の興味を問題にしたものである。この雅俗の問題に関しては乾裕幸氏が「談林の中庸思想」において詳細に論じられているが、こうした手法は貞門俳諧のものとは明らかに異なったものといえるであろう。このように『隠蓑』には釈教語がしばしば有効に用いられているが、右にあげた六つの発句では、頭北面西、下化衆生、五十六億七夕（七千年）、念仏師匠（衆生）撰取不捨などにそれが見られる。こうした釈教語は、いきおい一つの漢語的なリズムを持ち、その強い響きに示唆されて似船は『安楽音』に見られるような漢詩文調にまで進んでいったものではなからうかと思われる。この問題に関しては、さきにあげた拙稿「釈教俳諧釈教句に関する一考察」において触れたので重ねて述べるのは略すが、こうして談林的な影響と、釈教語・漢語などの影響をつよくうけた似船が、延宝六年から八年にかけての自分自身や門下の主要な作品をおさめて、『安楽音』は刊行されたのである。

三

筆者は、『安楽音』の漢詩文調の具体的な分析を行ない、また似船の俳風から『安楽音』にいたる過程を述べてきたが、つぎには同時代の俳諧撰集に目をむける必要がある。その一つのバロメーターとして延宝九年（天和元年）の刊行ないしは成立と思われる俳書を示してみよう。

江戸……東日記（言水）功用群鑑（松意）次韻（桃青）

京都……七百五十韻（信徳）ほのく立（高政）安楽音（似船）雑巾（常矩）万水入海（一晶）藁付贅（一晶）

大坂……山海集（賀子）西鶴大矢教（西鶴）みつがしら（賀子）一夜菴建立縁起（惟中）坂八五十韻（来山）

地方……それ／＼草（友悦）加賀染（長子・一平）熱田宮雀（兼頼）詠句大概（曙舟）おくれ双六（清風）

注（一）内は編者、伝本未詳のものはこれを除いた。

もちろん、延宝末年の俳壇の動向や俳風を知るには、この年一年の俳書によることは十分とは言えない。しかしこの年一年に限っても俳壇や俳風の変り目をあざやかに示してくれている。『西鶴大矢教』に典型的に見られるような、宗因流の軽口頓作がいまなお主流をなしている大坂俳壇を、筆者は問題にしているのではない。問題とすべきは、江戸と京都の俳壇の動向およびその俳風である。この年江戸と京都では、期せずして同じような漢詩文調の強い傾向をもつ俳書が出版されている。しかしその漢詩文調も、

具体的に内容を検討してゆくと、二つに分けて考えることができそうである。一つは筆者がすでに問題とし述べてきた『安楽音』の傾向であり、いま一つは京都の『七百五十韻』と江戸の『次韻』とを結ぶグループの傾向である。

まず前者の傾向は、京都俳壇においてかなりな勢力があったと思われ、同じような傾向は前年の延宝八年九月十五日自悦の自序をもつ『洛陽集』にも示されている。そのうちから数句、例示してみよう。

風新し蛤開春の水

竹の子や或は客殿廊下の下

水又水いつれの工か浮巢の鳥

姫瓜や三千の林檎顔色なし、

燭を背で宝引成けりでつちが朋

天に烏鶺鴒地に井戸替や霧の箸

これらは漢詩文のもつ語調・表記・文体をとりいれたり、あるいは『倭漢朗詠集』『長恨歌』など人口に膾炙した漢詩文の詩句をパロディ化して取りいれており、『安楽音』の傾向となんら変わるところがない。要するに本歌取りを漢詩文取りにし、換骨奪胎の面白さを追求したもので、それ以上のものではない。

ところで後者の傾向であるが、その検討を『七百五十韻』の作品を分析することからはじめてみよう。

(イ)一石橋の鶺鴒のそら

賦ニ日月明ニ借シ楼船

名主先生鱸つるらむ

(常)之

(仙)巻

(如)泉

※

(ロ)家老つぎあひ舟客を送る

如何禅山青月白帰依和尚

生前出シ花一盃の露

(仙)巻

(常)之

(正)長

まず、の付句三句であるが、「鶺鴒」から魏武帝の「短歌行」の詩句「月明星稀烏鶺鴒南飛」を想定し、それが蘇東坡の「赤壁賦」に引用される(客ノ日月明カ星稀ノニ、烏鶺鴒南ニ飛フ此レ非ニ曹孟徳カ之詩ニ平ヤ)とことから「賦ニ曰……………」が出たものと思われる。そうして下五の「借シ楼船」は、「赤壁賦」が船を借りて清遊したときに作られたところからこう表現したのである。この二句の付合は、『安楽音』などとさほどの相違は見られない。『安楽音』にも

漢ノ武帝乃日日記乃鷹

浜つたひ秋風起リ米屋飛フ

北方ノ強岩くだく浪

(鉄)硯

(似)船

(鞭)石

などとあり、これは漢武帝の「秋風辞」の「秋風起テ兮白雲飛フ、草木黄落兮雁南ニ帰ル」を引用し、原拠の「白雲飛フ」を「米屋飛フ」と換骨奪胎しているのである。ところがそれにつづく付合の「名主先生鱸つるらむ」と「北方ノ強岩くだく浪」との間には、かなりな差違が認められよう。「名主先生」の場合は、明らかに前句「賦ニ曰……………」の人物を想定して、「借シ楼船」を借りるにふさわしい「名主先生」で応じている。これは、すでに心付的な手法が認められると思う。つまり前句に漢詩文や漢画の中のことき世界を認め、そこからいかにもふさわしい人物(名主先生)の

鱧を釣るさまを描写したのである。それに反し、『安楽音』では「浜つたひ」から「岩くたく浪」を、「秋風起リ」から「北方ノ強」を付けており、物付的な傾向がうかがわれる。これらは同じく『安楽音』で「秋の蟹けふる東坡のやいと箸（似）船ノ喜雨亭の楊枝さし結ぶ鳶の葉（鞭石）」と、東坡と喜雨亭の付合（喜雨亭ノ記）や、「磯枕電光石火ほくち飛フ（玉）竜ノ蝸牛のつ乃を鬼の諷ひ（釣）軒」の白楽天の「対酒」の詩句「蝸牛角上争何事、石火光中寄此身」からの付合の方法とまるで同じである。こうした物付的手法は、『七百五十韻』ではしたに見られなくなる傾向にある。さて(四)の付句三句であるが、「家老づきあひ」から「如何禅山青」月白シ帰依和尚」の間には、はなはだしい飛躍があり、その中に禅的な一つの境地や、漢詩文調の世界に深く通ずる余情というものを含んでいる。「如何」から「生前出シ茶一盃の露」は、前句の禅的な内容をうけて、それにふさわしい表現を応じて付けている。そこには当然のことながら、白楽天の「勸酒」の「身後堆金注北斗、不如生前一樽酒」の影響を見のがせないが、単なる換骨奪胎ではなく、その漢詩的な世界や余情をとりこんでいるのである。『七百五十韻』には、もちろん「揚屋はとちけん雲の空淋し（如）風ノ舌喰きつて初音血に鳴く（春）澄」のごとき妖怪趣味の句や、そのほか滑稽な表現、ふざけ・もじりなどが随所に見られる。しかし、そうした中に新しく、既述してきたような漢詩文調の傾向が示されていることは、大いに注目すべきであろう。

こうした『七百五十韻』の傾向は『次韻』へとうけつがれてゆ

く。『次韻』は、題簽に「追京七百五十韻。二百五十句 俳諧次韻 江戸」とあるように、京都の信徳らの『七百五十韻』の刺激を受けて出版されたものである。その漢詩文調を示してみれば、左のごときものである。

秋に対して所帯堂の記
白親仁紅葉村に送ルルカ （才）丸
（桃）青

※

禅小僧とうふに月の詩ヲ刻ム
雷盆鳴て芭蕉には風
花の今朝駅に羊を直切る也
楼にわらちをつるす比春 （才）丸
（揚）水
（其）角
（桃）青

※

寺々の納豆の声。あした涙ユ
よすがなき楡花売の老を泣ク
飛雨台ノ跡へ霞ニ空シキ （桃）青
驢馬ノ進マザル体キラノシ （其）角

これらを見れば、漢詩文の影響の大きさを知ることができよう。そうして、ここには単なる漢詩文調の詩句取りは、きわめて影がうすくなっている。もちろんまったく見られないわけではない、
「白親仁紅葉村に送ルルカ」には、黄山谷の詩「白頭対シ紅葉ニ、是落葉ヲ如何セン」の影響が感じられるが、それとて『安楽音』や『七百五十韻』のごとく、原拠をそのまま転化させるのではなく、明らかに内容を仕変えた方法である。そうして全体に漢詩文のもつ一つの詩境に対するあこがれや、そうした世界に対する限

りない共感が見られる。「飛雨台ノ跡ハ霞ニ空シキノ(桃)青ノ驢馬ノ進マザル体キラ／＼」(其)角のごときは、そうした情緒が強く感得されよう。こうした傾向は、一方では「所帯堂の記」「紅葉村」「飛雨台」のごとき漢語めかした新造語にもあらわれている。さらにまた「花の今朝歌に羊を直切る也」(其)角/楼にわらぢをつるす比春 (才)丸に見られる日常的な世界を、ことさらに漢詩文の世界にひきつけて表現しようとする姿勢も見られる。「次韻」の巻頭の二句は「鶯の足雉脛長く継添て 桃青/這句以荏荏子ヲ可ハ見ツ矣 其角」とあるごとく、きわめて荏子の影響が強いが、広田二郎氏が「俳諧萬言説の超克」で詳説されているので、いまは言及しない。

ともあれ次韻の新しい傾向は、このように単なる漢詩文調の換骨奪胎ではなく、その詩境に対する深い理解と共感の上に成り立ち、漢詩文調のもつ独自の清冽な詩境を移し得て、『七百五十韻』の立場をさらに一歩進めたものと言えよう。

以上二つの主要な漢詩文調の傾向について述べてきたが、同年刊の他の俳書についても考えてみたい。『東日記』や『雑巾』などにも漢詩文調は見えている。『東日記』では、桃青の発句「夜ル竊ニ虫は月下の粟を穿ツ」枯枝に鳥のとまりたるや秋の暮「富家へ喰ヒ肌肉ヲ、大夫へ喫ニ菜根ヲ予ハ乏シ/雪の朝独リ干鮭を噛得タリ」「夕貞の白ク夜ルの後架に昏燭とりて」などが収められており、明らかに「次韻」などと同じような吟調を見せている。『雑巾』には常短の発句「梶の葉売ル声に天下の露露けき秋也」とか連句では「小便所筏をくだしぬ/地龍、浮テ水ニ風吹レ月ヲ/蟪

姑の古郷波に荒ゆく」などの吟調が見られる。こうしてみると、常短なども『安楽音』の似船とは、やや異なる傾向を示しているように見える。また『ほの／＼立』は、多くの問題を含む書であるが「山里の垣根の蟬、蛸咲にけり 秋風/よめ菜つミすて地蜘蛛リ行 高政/空は春味増難遠く風連て 定之」など、吟調はきわめて奇矯だが、漢詩文調はさほど見られない。ただ注目すべきは「延宝九とせ上巳」の内田順也の序に「当風」として「木食やこす糸の秋に成にけり/枯枝に鳥とまりたりや秋の暮/雪の果大仏瘦て影もなし」と作者名のない発句三句を載せている点である。最初の句は従来信徳の句とされていたが、高政の名で『洛陽集』に載り、また『ほの／＼立』は高政の撰集であるところから、順也が彼に敬意を表して載せたものと考えられ、高政の作とすべきである。二番目の句は桃青のもので、三番目のものは誰の作かわからない。ともあれ桃青の句に注目し、それを掲げているところに、この高政一派の進むべき方向も見られ、『安楽音』とはやはり異なる傾向にあることが理解されよう。

四

『安楽音』は、序文・発句・付句・連句とすべてにわたって漢詩文調が盛り込まれており、そうした徹底ぶりは、俳諧においてはこの書をもってはじまるといってよいであろう。しかしそこに見られる漢詩文調は、きわめて低い次元のものである。それは漢詩文のもつ特有な語調・表記文体を用い、さらに漢詩文の詩句の換骨奪胎によって滑稽感を強く押し出そうとするものだった。

こうした方法は、貞門・談林俳諧の伝統にのっとっており、ただ素材として新しく漢詩文を大胆に大幅にとり入れたものであると言えよう。ところで同じ延宝九年に刊行された『七百五十韻』や『次韻』の傾向は、そうした単純なものではない。それはもとより漢詩文のもつ語調・表記・文体から出発しているのであるが、さらに進んで漢詩文のもつ個有な詩趣へ極度に緊迫し高張したりズムの世界と、閑寂枯淡な境地へにまで及んでいるのである。つまりまるどころ単なる漢詩文の表面上の影響だけでなく、それが深く内面にかかわる問題としてとらえられているのである。我々はこうした『次韻』の吟調の中にかすかな蕉風の胎動を聴きとることができよう。

ともあれ『安楽音』は、漢詩文調の全巻に横溢する俳諧撰集ではあるが、すでに述べたごとく高い評価を与えられるものではない。だがこうした似船らの吟調も、当時の俳壇においてはかなりの勢力であったこともまた疑いえない事実なのである。

註1 明治書院版『俳句講座1 俳諧史』。

2 桜楓社刊『中村俊定先生 近世文学論叢』所収。

3 桜楓社刊『初期俳諧の展開』所収。

4 島居清氏『俳諧次韻』の位置(連歌俳諧研究第10号)。

5 有精堂刊『芭蕉の芸術』後篇第二章。

6 疎学子氏『塵塚集(一)』(大阪俳文学 会報 第2号)。

〔付記〕 本稿は、昭和四十五年度早大国文学会において口

頭発表したものをまとめたものである。また小稿

をなすにあたり、『安楽音』の引用はすべて田中道雄氏の「翻刻俳書・安楽音」(有明工専紀要第2号 昭和42年3月)によった。記して謝意を表します。(一九七一年・一・七)

新刊紹介

『近世文学論集—小説と俳諧』

本書は、現在暉峻研究室に学ぶ面々がそれぞれの研究テーマを設定して、制限枚数にとられずに書いた論文を集めて刊行したもので、題目と執筆者は以下の通りである。

- 『聚楽物語』考(阿部一彦) ○『毛吹草』における重頼一派(田中善信) ○芭蕉の「さび」へのアプローチの爲の一試論(復本一郎) ○斎藤如泉考(雲英末雄) ○『好色一代女』論序説(谷協理史) ○『日本永代蔵』成立論・ノート(箕輪吉次) ○『世間胸算用』の創作意識(早崎捷治) ○『去来抄』解釈の一視点(堀切実) ○都賀庭鐘・遊戯の方法(徳田武)

御希望の方は国文研究室へ御一報下さい。

(A5判一段組。二八五頁。タイプ印刷。定価八〇〇円)